

「平和主義と現実主義」(2019. 8. 18)

できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさない。(ローマ 12 : 18)

8月4日は平和聖日である。上掲のみ言葉に従い、私たちは日本、そして世界の平和を祈った。このみ言葉はまさに日本国憲法9条の精神を表している。国際紛争の解決の手段としての戦力を永久に持たないとの宣言である。ただ現実的には自国への脅威に対しては専守防衛に徹することを条件に、軍隊ではなく自衛隊を置くことはよしと解釈している。だから、その活動は国内に留まり、外国に出て行つての戦闘行為は厳しく禁止している。

一方、ナチスなどの登場によってヨーロッパが蹂躪されていたとき、アメリカが平和主義をもってナチスの台頭を傍観していた。それを厳しく批判した人々もいた。彼らはキリスト教現実主義に立った施策を求めたのである。今日アメリカがISなど世界の様々な紛争に介入しているのはそのためであろう。

日本とアメリカ。平和主義は個人の行き方としては時に可能であっても、国家の道としては国民、あるいは他国の苦しむ人々に対して無責任の罪を犯す恐れがある。だが、現実主義が平和を実現できるかというところでもない。「力の均衡」による平和は見せかけに過ぎないのではないか。

平和主義と現実主義。両者はそれぞれの弱点を補いあう意味で互いを必要としている。平和主義は現実主義に守られることでその活動の場を持つことができる。一方、現実主義は平和主義からの絶えざる批判にさらされなければ、武力は肥大化しその行使は悪魔的なものになりかねない。イージス・アショアもその一つだ。

日本は平和主義に立っていくと決意した。それは世界が目指すべき誤りのないビジョンである。ところが、アメリカからは日本に不公平感を漏らす声が聞こえてくる。また、外務省はじめ為政者の中には、これまで日本のしてきた国際貢献が十分に世界に評価されなかったことに苛立(いらだ)ちを覚える声がある。

だが、日本はそのアメリカのためにも専守防衛に徹した方がいい。唯一の被爆国として、日本だからこそ為し得る国際的な貢献があるはずである。たとえ世界に正当に評価されなくても、喜んで上掲のみ言葉に従う私たちであり、日本でありたいと願う。



浦上天主堂にある
被爆したマリア像